ここ数日、男にシリコン棒で嫌というほど快感を教え込まされた場所だ。

その一点をイボイボの表面に抉(えぐ)られるたび、内壁は従順に快楽を拾い上げはじめた。この苦しい状況にもかかわらず、少年の悲鳴には悩ましい響きがまざりはじめる。

「ン″ぅ……ッ！？♡♡」

そうしてぞくぞくとした快感に背がしなりはじめたとき、またも玩具の動きが切り替わった。今度はまた、「中」の刺激だ。

「あぁ……ッ♡♡あぁあ……っっ！♡」

少年はもはや苦しさというより、孔全体に広がる快感によって声をあげていた。

はじめは拷問のように苦しかった孔内から、甘やかな痺れが湧きおこり、体内を熱に染めていく。

「ア″…っ！♡♡」

しばらくするとまた刺激が入れ替わり、また、あの棒全体がスイングするような動きになる。ごりゅッ♡ごりゅッ♡と変わらぬリズムで抉(えぐ)られる好(い)い場所がたまらなくて、少年は腰を淫(みだ)らに振りたくって身もだえる。

気づけば幼茎は、だんだんと芯を持ち始めている。しかしその根元には男に装着させられた拘束具が巻き付けてある――。このままいけば遠からず、少年にはいっそうの苦悶が訪れるに違いなかった。

「ぃや……、あぁ…ッ♡♡、……して……、これ…っ、はずして…ぇ…！」

恥も捨てて叫ぶ。
こんなに目まぐるしく振動が切り替わるなんて、男はきっと、この部屋の扉をすぐに出た場所にまだいるのだろう。一階に戻ったと見せかけて、その実(じつ)、少年の反応をうかがいながら、すぐ目の前の扉の向こう側でリモコンを片手にほくそえんでいるのだ。
そうとしか思えない。

「あぁあ…ッ！♡♡お、ねが……っ…、もう…あぁ…ッ！♡♡♡やめ……っ、」

今度は「強」だ。
躰の内側をえぐり取られるような凄まじい衝撃だが、刻一刻と、感じる淫楽は強くなってくる。少年は虚空に向かって腰をへこへこと突き出すようにしながら、苦しくて仕方がないはずの玩具をみずから締め付けさえした。

「も……もう……あぁッ…♡もうだめぇ……っ！あぁ…ッ♡♡ッ」